非行少年の自傷行為に関する考察
―心的特性に着目して―

Study on the self-mutilation of juvenile delinquents
―focusing on the psychological traits―

北條　愛*1　　小野広明*2
Ai HOJO　　Hiroaki ONO

Ⅰ．はじめに

自傷行為に関する研究は海外では80年以上も前から行われている。わが国では、1979年に西園・安岡がRosenthalら（1972）やPao（1969）の手首自傷症候群（wrist-cutting syndrome）に関する研究論文を紹介したことが契機となり、「手首自傷症候群」の概念が広まったといえる。しかし、西園と安岡が1970年代から1980年代にかけて精力的に「手首自傷症候群」に関する論文を発表したほかは、21世紀に入るまで、まとまった調査研究はほとんど行われてこなかった。その一方で、日本では自傷行為といえばいわゆる「リストカット」、すなわち手首自傷症候群を思い浮かべる人々が多いというように、日常用語としては、自傷行為＝リストカット（あるいはリスカ）という言葉が定着してきた。自傷行為の概念が多様でかつ様々に変化していく諸外国とは対照的である。しかし後述するように、リストカットは自傷行為の一つにすぎず、研究・専門用語としての自傷概念は他の多くの自分を傷つける行為を含む。

自傷行為の定義は、研究者や国・地域によって異なり、現在でも定型化はなされていない。研究者等によっては、自傷行為の概念には、自殺を意図する身体損傷行為を含むこともあれば、嘔吐・過度の飲酒や喫煙など身体に悪影響を与える行為のほか、いわゆるタトゥーや入れ墨など主に身体装飾意識や対外的な印象操作の意図（文化的要因）から行われる行為を含むこともある。しかし「自傷行為」を、意図や致死性の異なる多くの自己破壊行動を含む用語として扱うのではなく、自らの皮膚を切る、やけどさせる、身体を固いものに打ち付けるといった直接的損傷に限定して用いるべきだという考え方が示されている（松本，2012）。筆者も、身体にダメージを与える多くの行為まで自傷行為の概念に包括的に取り込んでは、必ずしも自殺の意図、自己装飾意識等からではなく、何かしらの精神的な負因から身体を物理的に傷つけている一群への焦点づけがぼやけ、結果としてその心的特性の理解と各々の緊急性に応じた心的援助を適切に行えないのではないかと考える。したがって、自傷行為の概念を明確にすることが重要である。ここで筆者は、自傷行為を「自殺等以外の意図から自らの身体を故意に傷つける行為」と定義し、その心的特性を明らかにしたいと考える。

ところで、先行研究によると、一般群に比べて非行少年には自傷経験のある者が多いということが明らかにされている（門本，2003；河喜多ら，2007；松本ら，2006）。そこで、本研究では上述した定義

＊1　埼玉工業大学大学院人間社会研究科心理学専攻修士課程
＊2　埼玉工業大学人間社会学部心理学科

による自傷行為の理解の幅を広げ、自傷のハイリスク群である非行少年に焦点を当てて、自傷行為の心的特性をより的確に分析したいと考える。この分析のため本研究では、非行少年の自傷行為に関して先行研究が明らかにしてきたことを整理するとともに、少年鑑別所及び少年院において自傷経験のある男女の少年に直接かかわっている専門官へのインタビュー調査を実施した。

Ⅱ．非行少年の自傷～先行研究から見えてきたこと

少年鑑別所に入所した少年を対象とした面接調査では、調査の対象となった少年のうち、20％強に自傷行為が見られた（門本, 2003）。また､河喜多ら（2007）が少年鑑別所に入所した少年を対象として行った自記式の質問紙調査においては､対象者の約70％が自傷行為の経歴を持つことが明らかとなっている。門本（2006）は、自研究の結果を踏まえ、自傷行為は非行少年の理解に重要な鍵概念であるとし、自傷行為歴のある者は、ない者よりも、薬物乱用歴や被虐待歴を有し、家庭内に情緒的な葛藤を抱えている場合が多いことを報告している。そして、自傷行為を呈する非行少年の性格特性としては、自傷感情の低さ、つまり『自分が価値ある存在であるという、容易に傷付かない自尊心を維持する能力』が概して低いと査定している。さらに、藤原ら（2011）は、非行少年のなかでも、自傷経験のある者の方が基本的信頼感が乏しく、自尊感情が低いという自研究の結果から、自傷経験のある少年は自傷経験の無い少年よりも発達初期の段階でつまずいていると言え、さらに攻撃性の向きは初期の成長・発達と大きく関連していると示しており、どれくらい人を信用できるか、つまり対人的信頼感の形成の有無が自傷行為の出現に大きく影響している、と結論づけている。先行研究によると、一般の自傷経験者の特徴としても人間不信傾向や対人緊張度の高さが示されており、人に対する信頼感の程度は、一般群・非行群に共通した、自傷行為の出現に関連する要因なのではないかと考えられる。

また、非行少年がなぜ自傷のハイリスク群なのかを考えた時、不良交友といったものが、しばしば自傷の手段を伝達する場となりえるからである、と門本（2008）は指摘している。非行少年の多くは、非行と同様、自傷について友人・知人から見聞きし、どうやってするのかを教えてもらい、実際に行為に及ぶ。そして、自らが作った傷を周囲から評価されることにより、『自分はみんなに受け入れられている』という安心感を得る。こういった非行少年が自傷に至るまでのプロセスは、その後の彼らに自傷行為というものが自分自身の居場所を得るための行為であり、他者に自分を認めてもらうための手段である、といった認識を与えてしまうのかもしれない。

松本（2009）は、「自傷行為を介して結ばれた仲間意識がもたらす異様な昂揚感は、自傷行為に対する心理的抵抗感を低下させ、自傷することに躊躇いを感じにくくさせる」と示しており、さらに「自傷行為の重症度が友人内でのヒエラルキーを決定するような雰囲気が生まれてしまうと、友人間で競い合い、強化し合うようになるので、集団の中でますます自傷行為が拡大してしまうことがある」としている。これらの松本の指摘も、非行少年が自傷のハイリスク群である要因に関連していると考えられる。

Ⅲ．少年鑑別所及び少年院の専門官から見た自傷を呈する非行少年の特徴～インタビュー調査結果

1）自傷の背景にあるもの

北條（2013）は、非行少年の査定に直接関わっている矯正施設の専門官（法務教官、法務技官を一括して専門官と呼ぶ）３名を対象とし、自傷を呈する少年の実態を探るという目的のもと、インタビュー調査を行った。その結果、自傷経験のある少年の特徴として、自己像が否定的、自尊心が低い、被虐待経験や外傷体験を持つ者が多い、両親との関係が悪い、などの要因が挙げられた。松本（2011）は、幼少時期における過酷な養育環境や、いじめ被害といったような、自身の存在を否定されるような被害体験は、自尊心や自己効力感に深刻なダメージを与え、子どもの基本的信頼感を破壊し、精神的苦痛に晒された際の援助希求能力に抑制的に作用する可能性がある、としている。先述したインタビュー調査の結果からも、自傷を呈する少年は、被虐待体験や外傷体験を持つ者が多いことが示されている。このことから、被虐待体験や外傷体験を持つ者は、対人的信頼感が十分に形成されず、また援助希求能力も低くなる可能性があるのではないか、と考えられる。したがって、援助希求能力が低く、周囲からの疎外感や拒絶感を感じる度合いが強いため、人に頼るということが難しく、精神的に追い詰められてしまった場合、自己を傷付けるというかたちでしか、自身のストレスを回避・あるいは消化することができない、という事態に陥りやすいのではないだろうか。

2）自傷を呈する少年の分類

インタビュー対象者となった専門官のうちの一人は、自傷を呈する少年は、「自傷をしてスッキリする子」と「自傷自体が目的ではない子」という、２パターンに分類することができるのではないか、という考えを示した（表１）。「自傷をしてスッキリする子」と「自傷自体が目的ではない子」の大きな違いは、自傷行為を行う際の動機の内容にある。前者の場合は、自傷を行うことによって得られる痛みが不快感を緩和してくれる、といったような“自傷の効果”を求めて自傷行為に至る者が多い。性格的な特徴としては、表面上は良い子であるが、自罰的で自己中心的であること等が挙げられていた。後者に含まれる少年は、自傷行為をあくまで周囲の気を引きつけるための手段として使用しており、「自傷をしてスッキリする子」が欲しているような感覚を求めて自傷を行っているとはいえないようである。また、この「自傷自体が目的ではない子」の中には、ストレス解消法が見つからず、やみくもに自身を傷付けてしまうようなタイプも存在するということが示された。矯正施設という場所では、集団生活が義務付けられており、また他者に対する暴力も禁止されている。こういったストレスを発散させる手段が限られている状況だからこそ、ストレスの捌け口が自分自身に向かっていってしまう可能性が高いのではないかと考えられる。

表１　インタビュー調査結果より自傷の動機からみた分類

	自傷をしてスッキリする子	自傷自体が目的ではない子
特　徴	・薬物経験者に多い ・ストレス耐性が低く、嫌なことがあると我慢できない ・表面上は面倒見もよく大人しくて良い子が多い ・「自分が悪いのではないか」と思ってしまいがち ・自傷に関して、「誰にも迷惑かけてないんだから、いいでしょ」という考え方を持っている子が多い	・傷害系の事犯経験を持つ少年もいる ・他人を引きつける手段として自傷を行う ・自傷することによって自分自身の大切さを確認している ・集団生活ができない ・人を傷つけてみたいという衝動を抑えることができず、自分を傷付けてみる

Ⅳ．自傷行為への理解と心的援助

ここまで、自傷を呈する非行少年の特徴として、自尊感情の低さ、対人関係の不安定さ、心的外傷体験を有している者が多いこと等が挙げられてきた。思春期・青年期に属する一般の男女を対象とした自傷研究においても、これと同様の心的傾向が見られるとの指摘がなされている（布柴，2012；。横山・市川，2006；森，2009）。

北條（2013）が行った矯正施設の専門官へのインタビュー調査から明らかになったように、ひとえに自傷行為経験があるとは言っても、自傷を行う際の動機は個人個人によって大きく異なってくる。「気分をスッキリさせる」、「自分を安心させる」といったような自己回復の効果を求めて自傷する者もいれば、他者からの注目や愛情を求めて自傷を行う者、また自身の攻撃性や衝動性を自傷という形でしか発散せざるをえなかった者など、さまざまである。これらを踏まえると、自傷行為を呈する者へのよりよい援助体制を考える際には、本人がもともと持ち合わせている心的特性や性格傾向だけでなく、自傷行為に至った動機にも焦点を当てることが重要であると考えられる。また、自傷行為を行なっているという問題の他に、対人関係が不安定であったり、虐待やいじめなどといった心的外傷体験を有する者に対しては、『自傷行為をしている』という目に見える問題にだけではなく、対人関係や心的外傷体験に関連する不安や悩みなど、目には見えない内的な問題にも触れながら、本人への今後の対応を考えていく必要があるのではないだろうか。

引用・参考文献

藤原美智子，米永絵美（2011）「非行少年の自傷・他害行為と関連する心理的要因等に関する研究」犯罪心理学研究，**49**，98－99.

山田聡子・藤山直樹（2008).『自傷行為』の概念の変遷　上智大学心理学年,**32**，51-58.

横山史隆，市川宏伸（2006）児童・思春期の自傷行為　こころの科学，127，30－34.

河喜多寛治，高橋哲，明星佳世子，村井久仁江，岡崎布三代（2007）非行少年の自傷行為に関する基礎的研究（2）　犯罪心理学研究，**44**，76－77.

門本泉（2003）非行臨床における自殺予防のための基礎的研究，**21**（1），91－97.

門本泉（2006）非行少年に見られる自傷行為の理解，心理臨床学研究，**24**（1），34－43.

門本泉（2008）非行と自傷　臨床心理学，**8**（4），517-521.

松本俊彦（2009）自傷行為の理解と援助「故意に自分の健康を害する」若者たち，日本評論社

松本俊彦（2012）自傷や薬物に向かう子どもの現状と対策（特集 つながり合い、ささえ合い！：子どもたちは、今），心と社会，**43**（2），30－34.

宮岡時雄（2008）子ども理解再考 シリーズ②自傷（リストカット）の流行 **SEXUALITY**（37），142－149.

森昌彦（2009）自傷行為を通してみた思春期の心性，奈良大学大学院研究年報，**14**，232－234.

布柴靖枝（2012）青年期女子の自傷行為の意味の理解と支援―行動化を繰り返しつつ、自分らしさを模索していった女子学生の危機介入　面接過程を通して―，学生相談研究，**33**，13－24.

間接引用文献

Pao, P. E.（1969）" The syndrome of deliberate self-cutting"*British Journal of Medical Psycology* vol.42 pp.195-206

Rosenthal, R.J.,Rinzler,C.,Walsh,R.&Klaunser,E.（1972）"Wrist-cutting syndrome：The meaning of a gesture"*American Journal of Psychiatry* vol.128 pp.1363-1368